季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM QUARTERLY

URL http://www.general-museum.fks.ed.jp

87

冬の展示

南会津の地図・絵図展

－福島県歴史資料館の資料から－

福島県立博物館

冬の展示

南会津の地図・絵図展

―福島県歴史資料館の資料から―

会期　平成20年1月19日(土)～2月24日(日)

主催　福島県立博物館　共催　福島県歴史資料館

二年前の冬、収蔵資料品展「江戸時代の地図・絵図―会津領二十三万石を歩く―」を開催しました。館蔵品の中から、さまざまなタイプの地図・絵図類を選び出し、皆様に御覧いただきました。

今回は、福島市にある福島県歴史資料館との共催で、資料館収蔵の地図・絵図類を博物館で展示してみようという企画です。資料館には、県内各地の諸家文書が寄託されていますが、とくに南会津地域のものが多いことが、ひとつの特色です。二館が協力して、貴重な資料を、地元で展示公開させていただくことになりました。

二年前にも感じたことですが、江戸時代の村の地図や絵図は、かならずしも華やかなものではありません。いったいどこに面白さがあるのでしょう。

○いまの景色　むかしの景色

図1は、「塔のへつり」（下郷町）のようすです。現在は、天然記念物に指定され、南会津を代表する観光地となっているところを、江戸時代後期にスケッチしたものです。図2は、最近、国立公園として独立した尾瀬地域のようす。尾瀬沼や燧山（燧ヶ岳）は今も昔も変わりません。図3は、ふたつの川が合流し、道が分岐する、江戸時代の叶津村（只見町）付近のようすです。越後へ抜ける八十里越の入り口になります。

現在近くに住んでいる方はもちろん、仕事や観光などで訪れたことのある方も、「あっ、あそこだ」と思い出すところがあるかもしれません。

○村の歴史のビジュアル版

村々の旧家に伝わった地図や絵図の多くは、何かを伝える目的をもって書かれます。それを読み解いてゆくと、江戸時代の村で何が起こっていたのかがわかります。

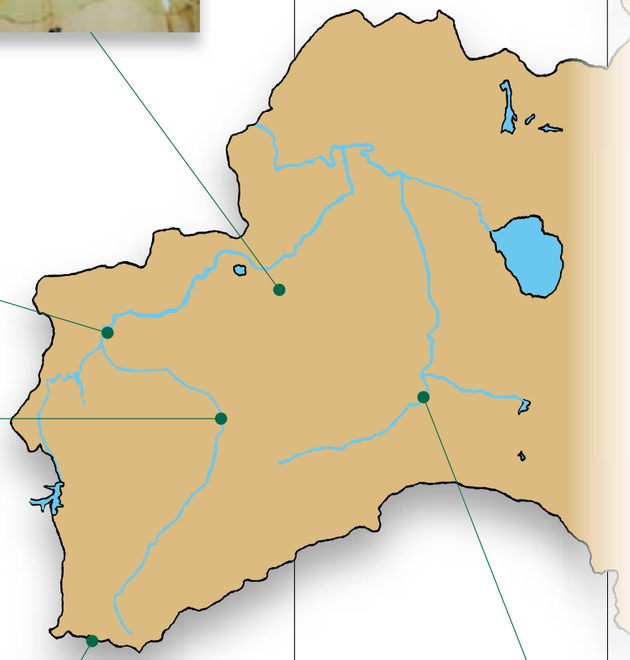
図4は、簡略な絵図ですが、伝えたいことは明白です。「大水で川が氾濫し、道がふさがった。何とかしてくれ～。」蛇行する川から水があふれ出ている絵は、子供が書いたようにも見えますが、じつは当時の村役人が、公儀に訴えるために真剣に書いたものです。この家には、洪水に関する地図・絵図類が他にもたくさん伝わっており、かつては毎年繰り返す洪水と対峙しながら暮らしていたようすがうかがえます。

図5は、別の村の絵図ですが、湖のように書かれているのは、川の増水によってできた水たまりで、それ以前は集落であったところ。その証拠に、よく見ると木立や家の屋根が水面に顔を出しています。江戸時代後期、大谷村（三島町）を襲った洪水のようすを描いた絵図です。洪水の被害は、村の記憶として後世にまで伝えられました。

地図や絵図の背景にある、このような村の歴史物語が伝わるような展示を目指します。

（歴史担当　高橋充）

図1　塔のへつり
「図書」より 当館蔵



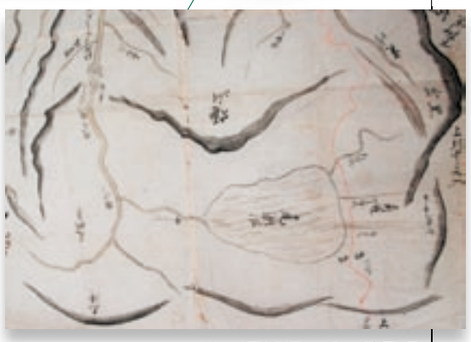


図2　尾瀬沼・燧ヶ岳周辺
「檜枝岐村絵図」より　檜枝岐村文書

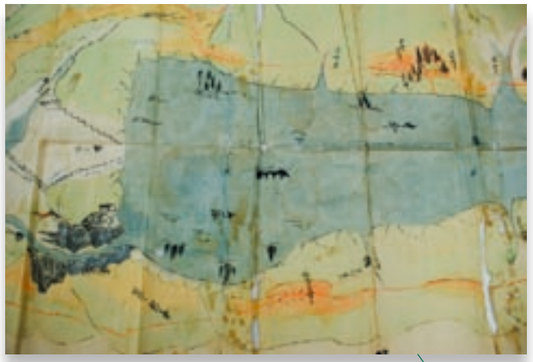


図5　洪水に沈んだ集落
「大谷村洪水絵図」より
二瓶八郎家文書

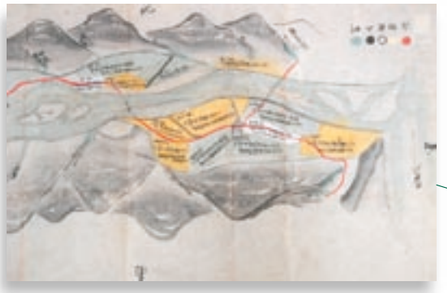


図3　江戸時代の叶津村付近
「村絵図」より
長谷部大作家文書

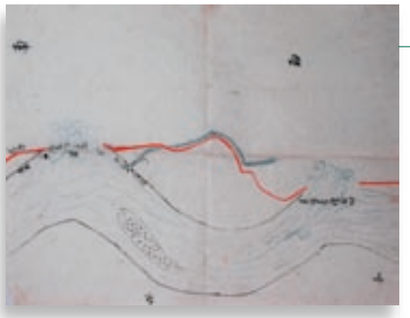


図4　伊南川の氾濫
「損所絵図」より
馬場新家文書

※ 諸家文書は、福島県歴史資料館収蔵。
※ 写真は、すべて資料の一部分です。

■冬の展示「南会津の地図・絵図展」は、平成二〇年一月一九日（土）～二月二四日（日）まで開催しています。
■観覧料　常設展観覧料で御覧いただけます。一般・大学生二六〇円（二一〇円）小中高校生は無料です。（　）は二〇名以上の団体料金です。

関連行事

○歴史講座
「展示室講座
『南会津の地図・絵図展』の見どころ」

講師　当館学芸員　高橋　充
日時　二月九日（土）午後一時半～
場所　当館視聴覚室・展示室
（常設展観覧料が必要です）

おもな展示品についてスライドなどで紹介した後、展示室で解説を行う予定です。

（表紙）南山御蔵入領絵図　当館蔵

秋の企画展
「わくわく！化石大集合 ―よみがえる300万年前のふくしま―」
関連事業

◎記念講演会
平成一九年一一月三日（土）
「ふくしまにもいた！アシカ・オットセイ ―浜通りの化石に見る鮮新世の哺乳類―」
講師　国立科学博物館研究主幹　甲能直樹さん

私は、アシカやオットセイ、セイウチなど鰭脚類（ききゃくるい）の仲間が、どのようにして水中で現在の生活をするようになったのかを、主に化石を用いて研究しています。今日は、鰭脚類とはどんな動物なのかを御紹介し、福島県浜通りの地層から見つかった化石を中心に、鮮新世のほ乳類についてお話したいと思います。

現在の鰭脚類は、アシカ、セイウチ、アザラシの大きな三つのグループに区別できますが、その起源については一〇〇年以上にわたって二起源説が提唱されてきました。これは、アシカとセイウチはクマの仲間と共通の祖先から、また、アザラシはイタチの仲間と共通の祖先から進化してきたとするものです。しかし、最近の分子遺伝学的な研究によれば、鰭脚類はすべてイタチの仲間と共通の祖先から進化してきたことが分かってきました。

さて、化石の研究から鰭脚類の歴史を遡（さかのぼ）っていくと、二八〇〇万年前頃の古第三紀漸新世（ぜんしんせい）に生息していた、アシカ・セイウチ・アザラシのどの仲間とも区別できない祖先グループにたどり着きます。鰭脚類全体の祖先から、鰭脚類の特徴を備えた祖先グループへの進化的変化は、この頃、かなり急激に進んだと思われます。

講演会のようす

その後、新第三紀中新世（ちゅうしんせい）になると、イマゴタリアと呼ばれるセイウチの仲間が繁栄しました。中新世以降、化石セイウチの仲間は一五種以上が知られています。一方、この頃のアシカの仲間はごく僅かです。しかしアシカの仲間は、新第三紀鮮新世（せんしんせい）になって一気に繁栄し始めます。反対にセイウチの仲間はこの頃から衰退し始め、現在では一科一属一種となってしまいました。

ところで、中新世のアシカの仲間の化石は、珪藻（けいそう）土など深い沖合の堆積物から見つかっています。そこで、いちばん最初のアシカの進化は、浅い沿岸部でセイウチが繁栄していた頃、化石が残りにくい沖合の海で起こったのではないか、ということが考えられます。

さて、福島県の浜通りに分布する鮮新世の地層から、鰭脚類の化石が多産しています。このうち、富岡町小良ヶ浜から産出する化石は約二五〇万年前のものですが、ここからは、現在のオットセイ、トド、アシカに繋がる祖先種の化石が勢揃いして産出しているので、この頃すでに、これらの仲間が別れていたことがはっきりと分かります。この頃の化石を調べることは、現在の鰭脚類の仲間へどう繋がっているかを知る上でたいへん重要です。

また、小良ヶ浜の同じ産地から、陸上ほ乳類の化石も見つかります。ゾウやシカ、イノシシなど、森林で生活していた哺乳類の化石が見つかったほか、驚くことに、ネコ科の動物の化石も発見されています。これは、切歯の大きさなどから推定すると、現在のトラよりもさらに大きい大型のネコ類だったと思われます。

このように、浜通り地域の鮮新世の地層からは化石が大量に産出しているので、この当時の哺乳類のようすを、かなり確実に推定することが出来るのです。

（要約：自然担当　相田優）

講演会後の展示解説会

会津と暦の関係

Q&A

回答者　歴史担当　阿部綾子

Q：よく「旧暦」という言葉を耳にしますが、具体的にはどのような暦ですか。

A：現在の暦は明治六年（一八七三）から使用されはじめた太陽暦（新暦）に基づいていますが、それ以前の日本では太陰太陽暦を用いていました。旧暦とはこの太陰太陽暦のことをさします。太陰太陽暦は太陰暦（月の満ち欠けの周期を基準として定めた暦。太陰とは月のこと）に太陽暦（地球が太陽の周りを一回りする時間を一年と定めた暦）の要素を加えてつくられています。現代の私たちは一年が三六五日・一二ヶ月であることにあまり疑問を感じずに生活をしていますが、旧暦ではひと月が三〇日（大の月）か二九日（小の月）で、数年に一度は閏月を入れて一三ヶ月となるなど、大きな違いがありました。また現在は二・四・六・九・一一月に固定されている小の月も旧暦では年によって異なったため、江戸時代の人々はその年の月の大小を覚えるのに歌や判じ絵を作るなど工夫をこらしています。旧暦から新暦への移行は一見小さな変化にも思われますが、実際に農作業や商売を行う上では大問題となりました。明治五年一二月三日をもって太陽暦の明治六年一月一日とすべきことが太政官から布告されたのは施行のわずか一ヶ月前。当時の混乱状況が目に浮かびます。

Q：会津は暦と関係の深い土地だと聞きました。どういうことでしょうか。

A：日本全国で同じ内容の暦が使用されるようになったのは江戸時代、貞享二年（一六八五）のことです。これが有名な渋川春海（一六三九～一七一五）による貞享暦で、日本の風土に基づいた初めての暦法でした。それまでは日本では長い間中国の宣明暦に基づいて各地の暦師たちがそれぞれに推算しており、地方により暦にズレが生じたともいわれます。こうした地方暦は会津の諏方神社でも作られていました。諏方神社で暦の版行がはじまったのを永享年中（一四二九～四一）とする記録もあります。江戸幕府は貞享改暦以後の編暦作業を幕府の天文方で行うことを定めるとともに、暦を出版する権利を京都・三島・会津・南都（奈良）・伊勢・江戸など数カ所の暦師に限定し、その流通経路を統制しました。この時暦の版行を許されたのは以前から暦をつくっていた由緒ある地域が多く、会津はその一つでした。具体的には諏方神社の三社家（諏訪氏・笠原氏・佐久氏）と百年程前から暦の販売を行っていた若松七日町の商人・菊地庄左衛門とが暦の版行を許され、この四家でつくられた暦は北関東から東北一円にかけて広く用いられることとなり、会津の名産となりました。これら会津産の暦は一般的に「会津暦」と総称されていますが、貞享改暦以前の古い暦には表紙に「諏訪新暦」などと書かれているため、「諏訪暦」と呼ばれることもあります。

貞享元年（1684）の会津暦　個人蔵（当館寄託）

諏方神社　「若松城下絵図屏風」より　当館蔵

＊「会津暦」や「若松城下絵図屏風」は歴史美術テーマ展示「会津暦」で一月二〇日（日）まで展示しています。

研究ノート

エピソードを記録する

榎　陽介　民俗担当

こんなものが記録に値するのか、はたまたそれが「学問」という領域に含まれるのかどうかについては疑問があったりするのですが、資料というかモノにまつわることで所蔵者が語るエピソードというものに興味が湧いてきています。

二〇〇六年の夏に開催した展覧会の準備の中であれこれ試行錯誤しながら、資料そのものよりもむしろ周辺にある語りに重心をずらすことも可能だと強く思わせることがありました。以下、その出会いのいくつかをご紹介しましょう。

1　戦中戦後の出会い

最初は古い衣類があるので、というので伺ったのですが、大正一〇年代の生れだというからもう八〇歳を超えているその女性はなかなかの話し上手でした。戦前、女学校を出てから軍需工場に勤めたこと。そのころ加わった音楽のサークルで見初められたけれども躊躇したこと。いろいろやりとりの後に結婚したのだけれども、婚家での生活の苦労あれこれ。使用人もいた嫁ぎ先での繕い物などの裁縫仕事。そして多趣味で、器用に何でもこなした夫の話し。音楽は和洋どちらでも得意で、そのうえスキーやゴルフも玄人はだしの腕前。会津を訪れた黒い稲妻トニーザイラーを案内したことなどなど。どれをとってもある意味で昭和会津物語外伝といった趣もあるようで、なにより語りの面白さがありました。そうそう、俳優の池部良さんとは軍需工場時代に知り合い、ずっと交流が続くのでした。あまりにもプライベートなこともあったりしてどこまで書いたりできるか分からなかったけれども、ともかくも記録することにしました。

毎年解いては縫い直した掛け寝巻き

2　好きな裁縫で

娘時代に見た着物の縫い目の美しさに魅せられて、プロの裁縫の道を歩んだ女性からも話を聞きました。こんなものがありますが、と思い出の仕事着などを持ってきてくれたのでした。高校卒業後、東京の裁縫教授所に四年間住み込んで習った修行時代のこと。それから、ふるさと会津での思い出。どれをとってもなんと話が面白いことか、と思っていたら、流れの中で昔話を幾つも語るではないですか。ものすごく足の速い大泥棒の話や赤ん坊を抱いた女の幽霊のことなど、普通の話から気がつくと昔話の世界へと変わっていっているのです。いずれも魅了されるような話しっぷりでした。

3　姉の嫁ぎ先の手紡ぎジバン

手紡ぎ手織りのジバンがあるのですがと知らせてくれた方もいます。自分の家に伝わるものではなく、嫁いだ姉の家に遊びに行った記憶と密接に結びついた資料でした。そこのおばあさんが綿を栽培し収穫し、糸を紡いで染めて織ったもの。手作業の結晶のようなこのジバンから、実母の思い出、形見のくけ台。そうしたいろんな思いが言葉となって寄せられました。それにしても楽しそうに話す方でした。

こうして展覧会に関わっていろんな女性から話が寄せられたのですが、それはある意味で雑多なエピソードの寄せ集めみたいなものです。とっても局所的な話題であったり断片的だったり。でも、雑多で雑然とした資料。しかし森の木々のように鬱蒼と繁るとき、おのずとこの木々を越えた姿を立ち現してくるのではと夢想するのです。

手紡ぎ手織りのジバン

エピソードを記録することは当面は好事家的な性格を払拭できないかもしれませんが、でも、その集積の先には確実に別な世界が開けるのだろうと考えています。

トピックス

県立博物館友の会、ご存知ですか？

来年度、友の会は創立二〇周年を迎えます。博物館活動を支援するために設立された「友の会」ですが、時代とともにその有り様も変化してきました。

「博物館が身近に感じられた…。」昨年一〇月二〇日に友の会主催で行われた文化祭に来館された方が、アンケートに書き残してくれた言葉です。少子高齢社会には、異世代間の交流が必要とされています。知恵と経験の豊富な高齢者と、人付き合いに恵まれない子どもたち…。彼らにともに学び、遊んでもらおうと企画した催し物でした。

これからの友の会は、博物館が今よりも一層市民に開かれた場になるように、一市民として博物館へ積極的に関わっていこうと考えています。来年も多くの企画を考えています。是非皆さんも入会なさって、文化の拠点作りに参加しませんか。

友の会文化祭のようす

◎ 会員になると…

その一　常設展・企画展の観覧が無料になります。
＊事前申込で法人賛助会員の団体入館が可能です。

その二　『博物館だより』『友の会会報』をお送りします。

その三　研修旅行など会の主催行事に参加できます。毎年５月下旬頃、県内外の史跡や名勝を訪問します。

＊企画展にあわせた講演会などを開きます。
＊古文書愛好会・化石鉱物探検隊も活動中！

◎ 会費は？

個人会員	2,000円
家族会員※	3,000円
※ 生計を同一にする家族が対象	
高校生会員	500円
法人・賛助会員	10,000円

◎ 手続きは？

受付カウンターでお申し込みください。
または、郵便振替をご利用ください。

口座番号 02110－3－15770
加入者名 福島県立博物館友の会

まほろん移動展

考古学から探る古代会津

～古墳・飛鳥・奈良・平安時代～

（新編陸奥国風土記巻之五会津郡・耶麻郡その２より）

―会津大塚山古墳から幻といわれた会津郡衙まで、いにしえの古代会津が甦る―

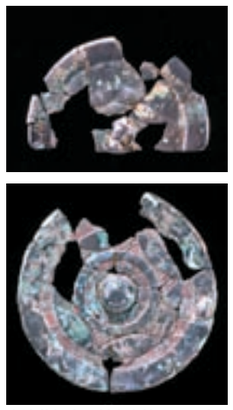
ヤマト政権の誕生から天皇を中心とする律令国家の成立と崩壊まで、そのダイナミックな歴史のうねりは、まほろばの地“会津”まで押し寄せてきました。古墳時代から平安時代まで、激動の古代会津を考古学から探ります。

（考古担当　横須賀倫達）

展示構成（予定）

Ⅰ部　会津の古墳・飛鳥時代
1　大型古墳と鏡の時代
2　謎の豪族居館と鉄鍛冶のムラ
3　区画するムラと崖に並ぶ横穴墓

Ⅱ部　会津の奈良・平安時代
1　古代国家「日本」へ
2　仏都会津のはじまりと平安ビトの祈り
3　次なる時代へ



会津若松市田村山古墳出土　内行花文鏡

■まほろん移動展は、平成二〇年三月一五日（土）～五月一一日（日）まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「会津暦」
会期　開催中～一月二〇日(日)

「こけし、張子に土人形
―郷土玩具大集合！」
会期　一月二六日(土)～三月一六日(日)

「ささやかなみやび
―子どもの着物と祝いの装い」
会期　三月二二日(土)～五月一一日(日)

第3土曜イベント

館長土曜講座「東北学3 シンポジウム
―会津磐梯山を考える」
コーディネーター　館長　赤坂憲雄
パネラー　磐梯山噴火記念館副館長
野口英世記念館学芸課長　佐藤　公さん
小桧山六郎さん
学芸員　竹谷陽二郎
日時　一月一九日(土)午後一時半～三時

「けんぱく雛祭り」
日時　二月一六日(土)午後一時半～三時半

「館長と語る昔話」
講師　館長　赤坂憲雄
おはなしおばさん　横山幸子さん
中川啓子さん
日時　三月一五日(土)午後一時半～三時

木曜の広場

場所　講堂　入場無料

旅人たちの見たふくしま
第一〇回「野田泉光院と『日本九峰修行日記』」
講師　館長　赤坂憲雄
学芸員　佐々木長生
日時　一月一〇日(木)午後一時半～三時

第一一回「イザベラ・バードと『日本奥地紀行』」
講師　館長　赤坂憲雄
学芸員　佐々木長生
日時　二月七日(木)午後一時半～三時

第一二回「柳田国男と勢至堂峠」
講師　館長　赤坂憲雄
学芸員　佐々木長生
日時　三月六日(木)午後一時半～三時

講演・講座

※は要申込

○歴史講座
「展示室講座1『会津暦』展の見どころ」
講師　学芸員　佐藤洋一
日時　一月一二日(土)午後一時半～三時

「展示室講座2
『南会津の地図・絵図展』の見どころ」
講師　学芸員　高橋充
日時　二月九日(土)午後一時半～三時

「展示室講座3　常設展の見どころ」
講師　学芸員　木田浩・星　幸
日時　三月八日(土)午後一時半～三時

実演

場所　体験学習室

「昔語り」
講師　語り部　山田登志美さん
日時　一月一四日(月)午後一時半～三時

体験講座

※は要申込

※「おもちゃをつくろう③」
講師　展示解説員　遠藤智子　他
日時　三月九日(日)午後一時半～三時半

はくぶつかんで遊ぼぉ！

場所　体験学習室

「ひな人形をつくろう」
日時　二月二三日(土)
午前九時半～午後四時半
＊展示解説員がご案内いたします。
＊時間内随時受付　所要時間二〇分程度

やさしい展示解説会

＊展示解説員による常設展の案内です。
＊毎週土曜日、日曜日の午前一一時と午後二時から三〇分ほど行います。
＊なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

＊その他、行事等の詳細に関しましては、月行事予定やホームページをご覧ください。

一～三月の休館日

年末年始　一二月二八日(金)～一月四日(金)
一月　七日(月)・一五日(火)・二一日(月)・二八(月)
二月　四日(月)・一二日(火)・一八日(月)・二五日(月)
三月　三日(月)・一〇日(月)・一七日(月)・二一日(金)・二四日(月)・三一日(月)

季刊博物館だより　第87号　2007年12月26日発行　編集・発行　福島県立博物館　〒965-0807 会津若松市城東町1－25　TEL 0242-28-6000　印刷　株式会社アポロ　会津若松市七日町14－7　TEL 0242-22-5139